

3. 樹脂付着量は同条件の場合いずれもⅠがもっとも多く、Ⅱでは綿繊維のほうに多く結合している。樹脂量が増すとⅠは防シワ度が上昇するが、Ⅱ、Ⅲではむしろ低下し、とくにⅢは原布よりも低くなる。ただし原布そのものは $I < II < III$ である。屈曲摩もうはいずれも原布よりも弱くなり、Ⅰはとくに著しく劣化する。示差熱分析によると、Ⅰは加工によってかなり曲線が変り、橋かけ結合の存在も予測されるが、Ⅲでは変化が少ない。Ⅱの *o*-クロルフェノールによるポリエステルを溶出したあと、防シワ度の変化はなく、樹脂成分は綿繊維への効果だけともいえよう。

B—17 樹脂加工布の耐摩もう性について

お茶の水女大家政 松川 哲哉
愛知大短大 ○戸沢 幸枝

1. 樹脂加工布の耐久性のうち、摩もうがもっとも損傷の原因となるものと考え、原布種別や加工条件との関連を検討し、また樹脂の分布の影響も知ろうとした。試験布としては、耐摩もう性がとくに問題となっているパーマネントプレス加工を選んだ。

2. PP 加工が広く実施されている綿・ポリエステル 35:65 混紡布(Ⅱ)、対照として綿布(Ⅰ)、ポリエステル布(Ⅲ)のいずれも平織物を用い、イミダゾリドン系その他の樹脂成分 2.5, 5.0, 10.0% 水溶液により、常法に従って加工をした。樹脂付着量、防シワ度、平面および屈曲摩もう強さなどを測定し、さらに摩もう前後の示差熱分析を試みた。